

ちくし 筑紫氏、隈村を返還する

太宰府天満宮社家の満盛院の領地をめぐる、戦国時代に引き起こされたトラブルに関する色々なエピソードを、これまで数回にわたって紹介しています。中でも大永6（1526）年には複数のもめ事が起きており、すでに取り上げた筑前国早良郡の戸栗・重富（本紙昨年10月号No.10001・本年1月号No.10004）以外にも、御笠郡の隈村（現筑紫野市大字隈周辺）をめぐる筑紫氏と争っています。

満盛院は、前年の同5（1525）年以来、領地の隈村12町の地を返還するよう、たびたび筑紫氏に訴えていました。ちょうどこの頃、満盛院は筑前国守護の大内義興に訴えて、各地の領地の安堵（領有を承認すること）を取り付けています。筑紫氏のものとなっていた隈村についても、これを機に大内氏の威光を背景に、取り戻そうとしたのだと思われまふ。これに対し筑紫氏は、当主の秀門は返還に納得したけれども、実行しないまま引き延ばしてまいりました。その理由は、後室（先代の当



主満門の妻か）がこれに従わなかったからとされています。筑紫氏は同4（1524）年に当主満門が少弐氏の重臣馬場頼周に殺害され、秀門が跡を継いでまだ日が浅かったため、家の中が一つにまとまっていないう状態だったようです。ともあれ何とか同意を得て、隈村は満盛院に返されることになりました。

ところが、隈村をめぐる満盛院と筑紫氏の争いは、5年後の享祿4（1531）年に再燃しています。この時は筑紫一族の尚門が当事者で、同じ肥前国の龍造寺左衛門佐もこれに関与していたようです。そのため満盛院からの訴えを受けて、筑紫氏の当主正門と、水ヶ江龍造寺氏の当主家門の双方から、隈村を返還すると満盛院に伝えられています。その後も隈村をめぐる満盛院と筑紫氏の争いは解決せず、たびたび繰り返されていきました。

【バックナンバーはこちら】

ページID 7241

太宰府市公文書館

大塚 俊司